

# サード・プレイスとしての立ち飲み屋に関する研究

大阪大学大学院工学研究科 木村 毅  
大阪大学大学院工学研究科 松本 邦彦  
大阪大学大学院工学研究科 澤木 昌典

## 1 はじめに

都市には都市居住者にとって生活上欠かせない「二つの居場所」、ファースト・プレイスである家、セカンド・プレイスである職場や学校に加え、居心地のよい三番目の居場所「サード・プレイス」が必要であると言われている<sup>1)</sup>。この「サード・プレイス」の在り方が都市の魅力を大きく左右すると考えられる。

西欧においてはカフェやパブがサード・プレイスの代表事例として挙げられ、住民の多くがカフェやパブを「憩いと交流の場」として毎日のように利用している<sup>2)</sup>。しかし、日本においては、住宅と職場環境の整備はされてきたが、都市の魅力を高めるサード・プレイスの整備は依然として未熟である<sup>2)</sup>。そのため、心の豊かさをもたらしことができ、他者との交流が存在するサード・プレイスに対するニーズが存在すると考えられる。

マイク・モラスキーは、日本におけるサード・プレイスの代表例として、「赤提灯や大衆酒場のような庶民的な居酒屋」が挙げられると述べており、さらにそこではカウンターが一種の共有空間となり、店主や周囲の客の会話が共有され、とくに常連同士なら自然と他者の会話に加わることが見られると述べている<sup>1)</sup>。

本研究では、庶民的な居酒屋の中でも立ち飲み屋<sup>4)</sup>に焦点を当てる。立ち飲み屋は、値段の安さから、気軽に立ち寄りやすい場所であると考えられる。また、カウンター越しによる店員と客との会話や、客同士の立つ場所の近さがあるため、交流が生まれやすく、サード・プレイスとなりうると考えられる。

こうしたサード・プレイスに関する既往研究には、セカンド・プレイスである職場周辺で構築されるサード・プレイスの実態を明らかにした林田らの研究<sup>3)</sup>、大学生を対象としてまちなかで構築されるサード・プレイスの実態を明らかにした十左近らの研究<sup>4)</sup>などサード・プレイスの構築に関する研究が存在する。また、主婦によるカフェの利用実態からサード・プレイスを考察した江藤らの研究<sup>5)</sup>、カフェ利用者の行動観察調査からサード・プレイスの分析を行った畠山らの研究<sup>6)</sup>など特定の場所の利用実態からサード・プレイスを考察する研究が存在している。

しかし、これら既往研究の多くがサード・プレイスとして対象としている場所はカフェであり、立ち飲み屋を対象とした研究はみられない。そこで、立ち飲み屋における利用実態を把握することで、わが国におけるサード・プレイスに関する新たな知見が得られると考えられる。

そこで本研究では、立ち飲み屋の空間的状況から、立ち飲み屋の利用実態および立ち飲み屋における交流を明らかにし、立ち飲み屋のサード・プレイスとしての特徴を考察することを目的とする。

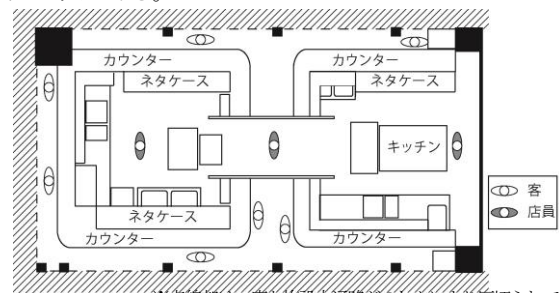
## 2 研究の方法

本研究では、調査協力の得ることができた大阪府吹田市朝日町の大規模商業施設の地下1階に位置する立ち飲み屋Mを対象とし、2014年1月15日から31日の営業時間内に、客に対するアンケート調査を実施した。調査票は、来店した客に手渡しで配布し、その場で記入してもらい回収した。配布数134のうち回収数は130で、回収率は96.3%であった。

アンケート調査の質問項目は「立ち飲み屋における交流」、「お気に入りの場所<sup>2)</sup>の存在」、「立ち飲み屋の居心地」、「来店理由」、「来店頻度」、「属性」とした。

## 3 調査対象の立ち飲み屋

本研究で調査対象とした立ち飲み屋は、JR吹田駅から徒歩2分の立地にあり、利便性が高い場所に位置する。JR吹田駅周辺は、JR大阪駅まで9分でアクセスできることから、大阪へ通勤するサラリーマンが多く居住する郊外型中心市街地である。また、アサヒビールのビール工場や企業の事業所等も存在することから、駅周辺で働く人も多い。さらに、大型商業施設および商店街が存在し、ファミリー層から高齢者層まで幅広い人に利用されている。立ち飲み屋Mは、平成18年4月に開業し、広さは36.7m<sup>2</sup>で、長方形の平面形状(図1)となっている。また、三方向に扉のない開口部が設けられているため、客が気軽に出入りができるようになっている。営業時間は、12時から22時までであり、毎週土曜日が定休日である。また、1日の平均来店客数は約170人である。



※点線部は、店と施設内通路がのれんにより区切られている。  
また斜線部は、商業施設内の通路部である。

図1 立ち飲み屋Mの平面図

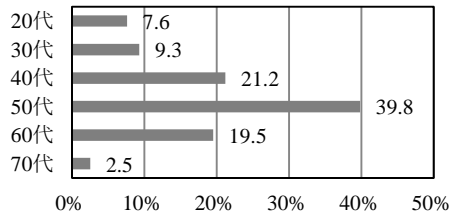


図 2 回答者の年齢 (n=118)

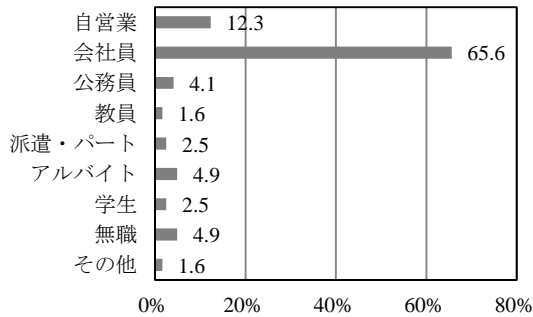


図 3 回答者の職業 (n=122)

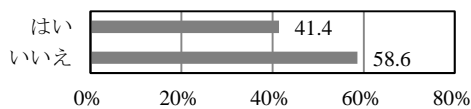


図 4 お店で知り合いや飲み友達ができただか (n=128)

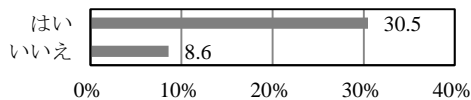


図 5 他の場所での交流の有無 (n=50)

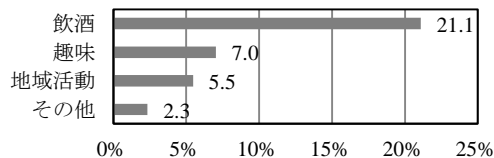


図 6 他の場所での交流の内容 (n=39、複数回答)

## 4 調査結果

### (1) 回答者の属性

回答者の性別は、男性が 93.5%、女性は 6.5%であった。図 2 に回答者の年齢を示す。平均年齢は、50.6 歳であった。50 代が 39.8%と最も多く、次いで 40 代の 21.2%、60 代の 19.5%であり、中高年層が多い。

図 3 に回答者の職業を示す。会社員が 65.6%と最も多く、次に自営業が 12.3%であった。40 代から 60 代の男性労働者が中心とした属性分布となっていることが分かる。

### (2) 立ち飲み屋における客同士の交流

図 4 に回答者が店で知り合いや飲み友達ができただ割合を示す。41.4%が店で知り合いや飲み友達ができている。

図 5 に店でできた知り合いや飲み友達との他の場所での交流の有無を示す。全体の 30.5%に他の場所でも交流が生じていることが分かった。

図 6 に他の場所での交流の内容を示す。全体の 21.1%に

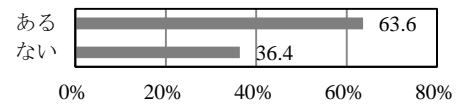


図 7 他の客との会話の有無 (n=129)

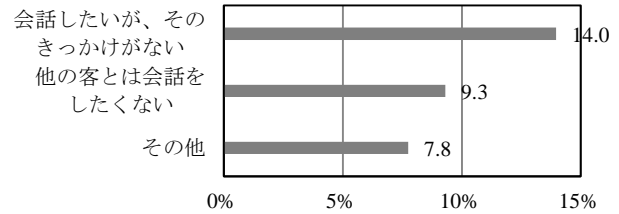


図 8 他の客との会話がな理由 (n=39)

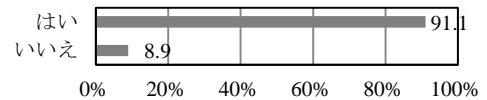


図 9 お気に入りの場所の有無 (n=124)

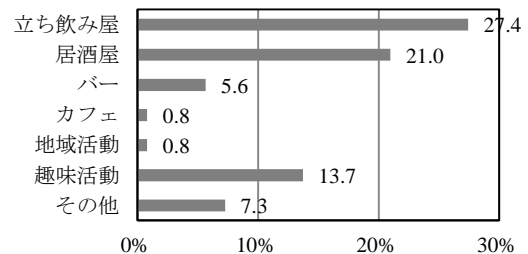


図 10 お気に入りの場所 (n=95)

他の場所でも「飲酒」による交流があることが分かった。主には、「飲酒」や「趣味」を通じた交流関係が生まれやすいことが分かるが、「地域活動」という地縁型活動も少し見られる。

図 7 に他の客との会話の有無を示す。36.4%の人に他の客との会話がなことが分かった。

図 8 に他の客との会話がな理由を示す。全体の 14.0%の人は「会話したいが、そのきっかけがない」と思っていることが分かった。

### (3) お気に入りの場所の存在

図 9 にお気に入りの場所 (サード・プレイス) の有無を示す。91.1%が家や職場以外のお気に入りの居場所が存在すると回答している。

図 10 にお気に入りの場所を示す。全体の 27.4%が「立ち飲み屋」、21.0%が「居酒屋」、5.6%が「バー」をお気に入りの居場所としており、約 5 割が飲酒関連の店をお気に入りの居場所としていることが分かった。「その他」には、カラオケや温泉などの回答があった。

図 11 に立ち飲み屋での居心地の評価を示す。63.1%が立ち飲み屋の居心地が「とても良い」、36.1%が「良い」と回答しており、ほとんどの人が立ち飲み屋の居心地を良く感じている。これらから、立ち飲み屋がサード・プレイスになっている可能性があると考えられる。

図 12 に立ち飲み屋の居心地の評価の理由を示す。気楽に

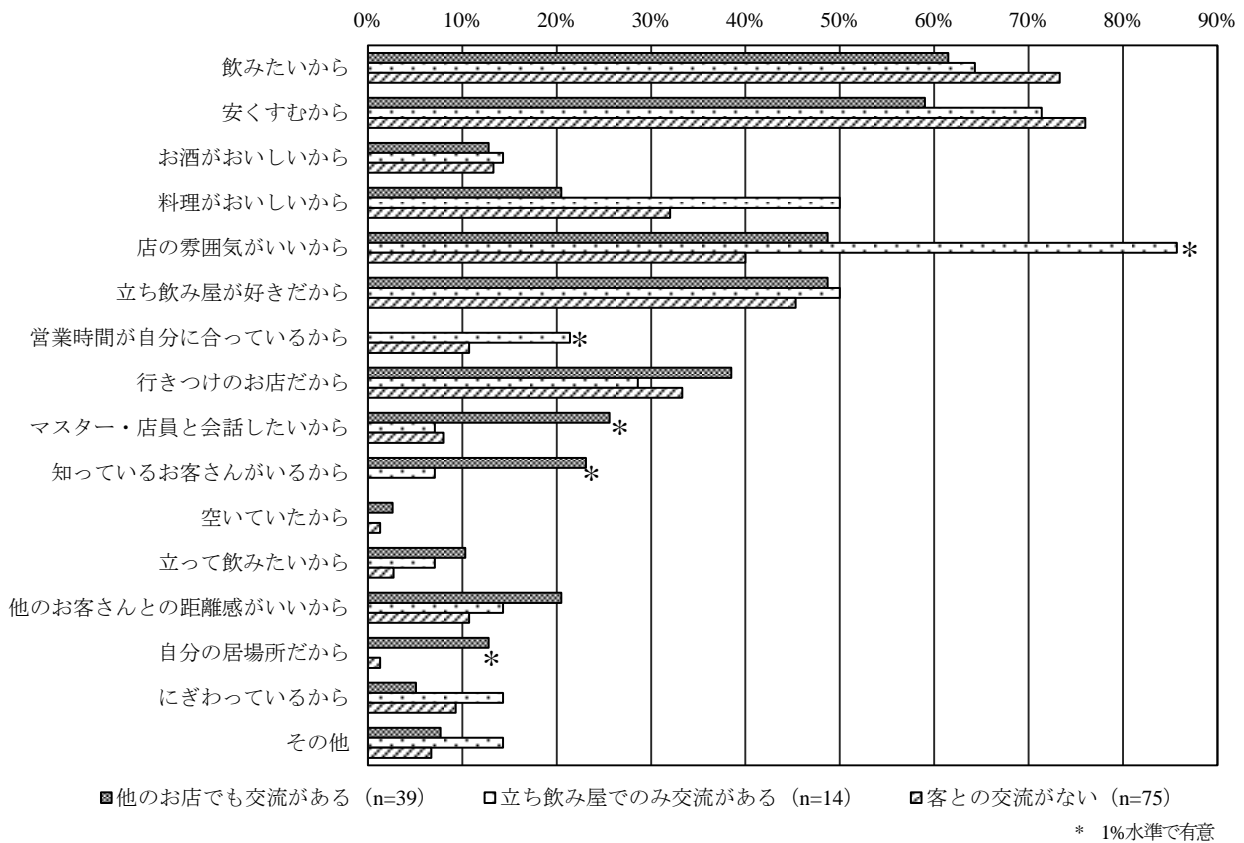


図 13 交流の違いによる立ち飲み屋への来店理由の違い (複数回答)

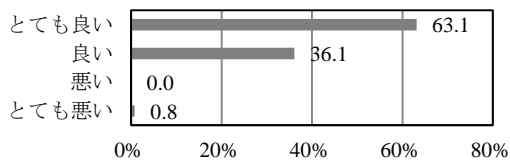


図 11 立ち飲み屋の居心地 (n=122)

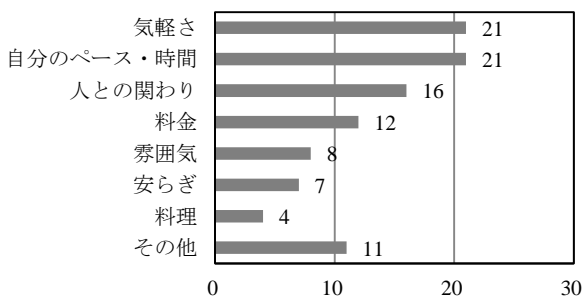


図 12 立ち飲み屋の居心地の理由 (n=97, 自由記述、複数項目あり)

飲酒をすることができたり、来店することができたりする「気軽さ」、自分だけの空間や時間などの「自分のペース・時間」、客との距離感や交流などの「人との関わり」に関する項目が高かった。

#### (4) 立ち飲み屋における交流の違いによる分析

サード・プレイスは、他者同士の交流が生まれる場所である。そのため、①立ち飲み屋で知り合いや飲み友達が多くなった人、さらに②その人と他の場所での交流がある人、③

客との交流がない人の3つの属性に分類し、分析を行った。

図 13 に交流の違いによる立ち飲み屋への来店理由の違いを示す。交流の違いにかかわらず、「飲みたいから」、「安くすむから」が半分以上と高い割合を占めている。他の店でも交流がある人には、「マスター・店員と会話したいから」、「知っているお客さんがいるから」が 1%水準の有意差で高く、安く飲むという目的だけでなく、店での他者との交流をも求めて来店していることが分かる。さらに、「自分の居場所だから」も、交流のある人で 1%水準の有意差で高い。また、立ち飲み屋でのみ交流のある人には、「店の雰囲気がいいから」、「営業時間が自分に合っているから」が 1%水準の有意差で高く、交流目的というよりは、店の雰囲気の良さにより来店していることが分かる。

図 14 に交流の違いによる来店頻度の違い (1%水準で有意) を示す。他の店でも交流がある人は、「ほぼ毎日」、「週に 2、3 回」来店する人が多く、立ち飲み屋でのみ交流のある人は「週に 2、3 回」、「週に 1 回」来店する人が多く、交流のない人は、「週に 2、3 回」、「月に数回」来店する人が多い。このことから、交流のある人ほど頻繁に立ち飲み屋に来店していることが分かる。

## 5 まとめと考察

### (1) 調査結果のまとめ

本研究では、吹田市朝日町の立ち飲み屋 M を対象として、アンケート調査を行った。家や職場以外のお気に入りの居

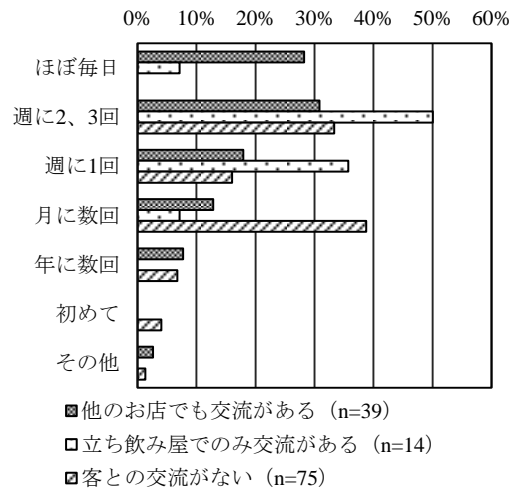


図 14 交流の違いによる立ち飲み屋への来店頻度の違い

場所（サード・プレイス）が存在する人が 91.1%いることが分かり、27.4%の人が「立ち飲み屋」をお気に入りの場所としていた。

サード・プレイスの一つの機能である他者との交流が 41.4%の人に存在し、さらに、立ち飲み屋で知り合った人と他の場所での交流がある人が 30.5%いることが分かった。他者との交流がある人ほど、交流を求めて来店する人も多くいることが分かり、来店頻度も高いことが分かった。このことから、立ち飲み屋が西欧のカフェやパブのようにサード・プレイスとして機能していることが分かった。

また、他の客との会話は、36.4%の人に他の客との会話が、14.0%の人は「会話したいが、そのきっかけがない」と思っていることが分かった。

## (2) 立ち飲み屋のサード・プレイスとしての特徴の考察

立ち飲み屋の居心地についての設問では、ほとんどの人が「とても良い」または「良い」と感じており、わが国における立ち飲み屋が、西欧のパブやカフェのようにサード・プレイスとなりうると思われる。立ち飲み屋では交流がみられ、立ち飲み屋で生まれた交流が違う場所での交流にもつながっており、さらに立ち飲み屋でできた知り合いや飲み友達がいる人の方が立ち飲み屋に頻繁に来店していることから、彼らにとって立ち飲み屋が一つの居場所になっていると考えられる。現在日本では、コミュニティ・カフェ等の居場所づくりが進められているが、立ち飲み屋のような場所も同様に魅力的な場所となると考えられる。しかし、立ち飲み屋の客には、他者との交流を求めずに一人で酒を飲みたいという人もいることから、さまざまなニーズの客を受け入れる配慮は必要であると考えられる。

また、他の客との会話が、会話のきっかけを求めている人も存在し、サード・プレイスとしての機能をさらに高めていくために客同士の交流のきっかけづくりとして、店に備え付けのテレビの視聴等を通じた共通の話題、店主や店員を介した会話、すでに交流が生まれている人からの紹介などの多様な機会が存在する。これらの機会は、今回のアンケート調査では明らかにならなかったが、これらを

有効に活用していく必要があると考えられる。

## 6 今後の課題

今回の調査では、郊外型中心市街地に位置し、40代から60代の男性労働者が中心として利用している1軒の立ち飲み屋のみを対象としており、立ち飲み屋 M はサード・プレイスになりうるということが分かった。しかし、立ち飲み屋により周辺環境が異なるため、今回対象としたような郊外型中心市街地における立ち飲み屋では、サード・プレイスとして機能している可能性が存在するが、オフィス街などが立ち並ぶ都心部においては、この結果が必ずしも当てはまるとは限らない。今後の課題としては、周辺環境が異なる立ち飲み屋における客の利用実態をさらに探求していく必要がある。また、客同士の交流が存在することが分かったが、交流の内容を詳細に明らかにすることができなかった。そのため、交流の内容もさらに探求していくことで、立ち飲み屋のサード・プレイスの特徴をさらに明らかにしていくことができると考えられる。

### 補注

- (1) 本研究における立ち飲み屋とは、「カウンターで、立ったまま飲食を行う酒場」のことをさす。
- (2) お気に入り場所としたのは、サード・プレイスという言葉、回答者が知らない可能性があったため、分かりやすい言葉に置き換えた。

### 参考文献

- 1) レイ・オルデンバーグ (2013)、「サード・プレイス コミュニティの核になる『とびきり居心地よい場所』」、みすず書房
- 2) 久繁哲之介 (2007)、「都市にサード・プレイスを創る」、Urban Study, Vol.47, p4~p18、民間都市開発推進機構
- 3) 林田大作、舟橋國男、木多道宏 (2003)、「職場周囲に構築される『サード・プレイス』に関する研究 -神田地域・品川地域の比較分析-」、都市計画論文集、No.38, p433~p438、日本都市計画学会
- 4) 十左近侑里、林田大作 (2010)、「まちなかに構築される居場所に関する研究 -和歌山大学・鹿児島大学・金沢大学の学生を対象として-」、日本建築学会学術講演梗概集、p757~p758、日本建築学会
- 5) 江藤道子、鈴木毅、松原茂樹、奥俊信 (2011)、「主婦にとってのカフェの場所性に関する研究」、日本建築学会学術講演梗概集、p 833~p834、日本建築学会
- 6) 畠山雄豪、佐野友紀、菊池雄介、丹波由佳里、佐藤泰 (2012)、「立地環境が与える影響行動観察調査からみたカフェのサード・プレイス利用分析 その 1」、日本建築学会学術講演梗概集、p877~p878、日本建築学会